**「ラーマクリシュナの福音」勉強会　第４５回　（２０１８年６月１２日）**

**・第４５回の勉強範囲：「第一章　師と弟子」１８頁～１９頁**

**シュリー・ラーマクリシュナは両極端な性格を持つ（前回の復習）**

シュリー・ラーマクリシュナは、愚か者⇔賢者、子供らしい⇔老練、プルシャ⇔プラクリティ、男性⇔女性など、両極端な性質を併せ持つ珍しい存在であるということを前回説明しました。

**シュリー・ラーマクリシュナはムードが急に変わる**

そして、女性のムード、子供のムードなど、状態が時々チェンジしましたね。あるときは全部混ざりあっているときもありました。しかしどのムードの時も、**そのムードのふりをしていたのではありません。聖者は決してふりをしませんから。**

シュリー・ラーマクリシュナは、その時のムードによって、受け入れられることが異なっていました。直弟子のひとりのプレマーナンダジは、とても純粋で清らかな方でしたが、シュリー・ラーマクリシュナのお世話をするためにもっと自分が純粋になるようにと祈りました。なぜなら、シュリー・ラーマクリシュナは、その時のムードによって、清らかでないものに触れられると痛がることがあったからです

**シュリー・ラーマクリシュのさまざまなムード**

**例１：女性のムード（モトゥル・バーブの奥様方とともに）**

インドで女性はあまり外に出る習慣はありませんでしたが、お祭りの時などは、皆さん着飾って外に出てきます。　あるドゥルガー・プージャのとき、モトゥル・バーブの奥さんや親戚がたとともに、サリーを着て飾りをつけた美しい女性がモトゥル・バーブの家から出てきました。モトゥル・バーブはそれが誰だかわかりませんでしたが、あとで、それがシュリー・ラーマクリシュナだったと聞いてとても驚きました

☞（『ラーマクリシュナの生涯』上巻５５１頁L１１~５５２頁L５）

*トゥミ　プルスキーナーレ　アメブジェーテー　ナレー　　♫*

*シャヨンナブージャレ　タケブジー　テーパリー　♫*

*あなたはプルシャかプラクリティかわからない。*

*あるときは男性のようであるときは女性のよう。ご自分で説明なさらないと、我々にはわからない*

というベンガル語の歌があります。

トゥミ（あなた）、プルシュ（男性）、キー（例えば）ナリ（女性）ブジテナリ（わからない）

シゃヨン（自分で）、ナブージャレ（理解させないとわからない）

**例２：恵みを与える力が全然ないときもあれば⇔高い恵みを与える力がある時もある（コシポルのガーデンハウスにて）**

信者がシュリー・ラーマクリシュナのところにやってきて、「どうぞ私に恵みを与えてください、祝福をしてください」ということがありました。そんな時シュリー・ラーマクリシュナは、「私にはぜんぜん力がないので出来ません、すべてマザーがなさいます」と言いました。

しかし、コシポルのガーデンハウスでは、皆さんに恵みを与えましたね。「みなが悟るように！」と。チャイタンニャ意識が現れる。それが一番高い恵みではないでしょうか。

☞（『ラーマクリシュナの生涯』下巻５４２頁L１~５４３頁L５参照）

**例３：女優をマザー・カーリーと見ているとき、そうでないとき**

劇作家ギリシュ・チャンドラ・ゴーシュのもとにいる女優は、ほとんどみんな売春婦でした。あるとき、女優のひとりがシュリー・ラーマクリシュナに触れましたが、シュリー・ラーマクリシュナは、まったく痛がりませんでした。彼女たちをマザー・カーリーと見なし、マー、マー、と言っていたからです。しかし、別のムードのときに女優に触れられると、とても痛がりました。

**例４：子供のようなシュリー・ラーマクリシュナ**

シュリー・ラーマクリシュナはコルカタまで馬車で行くときには、馬車の窓から外を見て子供のように無邪気に振舞いました。

**例５：急にシリアスなムードになる**

あるときシュリー・ラーマクリシュナとMさんが馬車に乗っていました。ふつうに会話をしていたのですが、突然シュリー・ラーマクリシュナの状態が変わりました。しかし、Mさんはそのことに気が付かず、馬車から見えたある人の別荘を指し示しました。　するとシュリー・ラーマクリシュナは「いまはそんなものに興味はない」とうるさがったのです。忘我の状態に入ろうとしておられたからです。　　　☞（『福音』３０頁上段L３～L９）

シュリー・ラーマクリシュナほどに両極端な性質を併せ持つ例はあまりないです。直弟子の中では、スワーミージーとブラフマーナンダジが、時々ムードが変わることがありましたが、シュリー・ラーマクリシュナほどではありませんでした。

シュリー・ラーマクリシュナは着飾ったと思ったら、次の瞬間には裸でいることもありました。これは、ふつうは頭のおかしい人の心理ですね。スワーミージーは愛情をこめてシュリー・ラーマクリシュナのことをマッド・マン、マッド・ブラーミンと時々呼んでいました。

・📖 （読む）「師と弟子」１９頁　頁末（注）

*ラーマーヤナ\*の中の物語。ラーヴァナ\*は、神の恩恵によって特定の天上の武器でしか殺されないことになっており、この武器は彼の宮殿の水晶の柱の中にとじ込めてあった。ある日ハヌマーンが普通のサルに化けて宮殿に入り、柱を壊して武器を奪った。ラーヴァナの妻マンドダリは、武器を持って逃げるサルを果物で誘惑し、武器を奪い返そうとした。すぐにハヌマーンは自身の姿に戻り、本文中の歌をうたった。*

**ラーマーヤナ叙事詩**

ラーマーヤナ叙事詩の一部を説明します。

ラーヴァナはとてもとても長い間、苦行をして、創造の神、ブラフマーからたくさんの恵みを与えられました。例えば、「『神様』や、『神でも人間でもない別の存在』には殺されない、という強い力」を与えられました。しかし、『人間』に殺されない力は与えられなかった。なぜなら、ラーヴァナはラクシャサ（魔もの）で、ラクシャサは人間を食べていたので、人間なんか怖くなかったからです。

ラーヴァナを殺すことができるのは、ある一つの武器だけでした。その武器の名前はブラフマーストラです。アストラは「武器」、つまり「ブラフマーからもらった武器」という意味です。その武器以外、別の方法でラーヴァナを殺すことはできない。ラーヴァナはその武器を自分の宮殿の柱の中に隠していました。

ラーマ（ヴィシュヌ神が人間になった姿）とラーヴァナの戦いが始まりました。

ラーマ軍のハヌマーンはふつうのサルの姿になって、宮殿に忍び込み、柱からその武器を取り出しました。ラーマは人間です。だからその武器があると、ラーヴァナを殺すことができたからです。

ハヌマーンがブラフマーストラを奪ったところをラーヴァナのお妃であるマンドダリに見つかってしまいました。マンドダリは「ふつうの数々の果物」でハヌマーンを誘惑しようとしました。　この果物は世俗的な楽しみのシンボルとして描かれています。

**ハヌマーン**

ハヌマーンはふつうのサルではありません。例えば、アイヌ部族のように、ある部族です。**ハヌマーンはとても高いレベルのギャーニーで、高いレベルのバクタでした。**

**ハヌマーンのバクティの強さの例（シーターからもらった真珠のネックレス）**

ハヌマーンのバクティはとても強いものでした。彼は神様が一番好きでした。

ハヌマーンはラーマの奥さんのシーターから、真珠のネックレスをプレゼントされました。真珠はとても高価なものですね。　しかしハヌマーンはネックレスの真珠を一つずつ、噛んで割り、中を確かめて捨てました。シーターはハヌマーンがサルだから、真珠の値打ちがわからないのだと思いました。しかし、ハヌマーンは言いました。「私は真珠の中にラーマがいるかどうかを調べていました。真珠の中にラーマはいませんでした。**ラーマの存在がないものなど、私はいりません**」と。

ハヌマーンはとても高いレベルの信者でした。**ラーマ以外私は知らない。別のことはなにも知らない。ラーマのお世話以外私は知らない。自分のことは全部忘れています。それくらい高いレベルの信者でした。**

ラーマを悟るために、最初はハヌマーンを喜ばせると、ハヌマーンのおかげでラーマを悟ることができます。

『福音』の中にハヌマーンの例がたくさんあります。

**例１：***あるときある人がハヌマーンに、その日が月の二週間の中の何日にあたるかとたずねた。ハヌマーンは言った、『兄弟よ、私はきょうが何曜日であるとか二週間の中の何日であるとか、星の位置はどうであるとか、そういうことは一つも知りません。ラーマだけを思っています』と」*　　　　　　　　　　　　　☞（『福音』５０頁上段L４～L９）

**例２：***ハヌマーンはラーマのへの信仰によって海を飛び越えたが、ラーマ自身は橋をかけなければならなかった。*　　　　☞（『福音』３８頁下段L５～L７）

**例３：***人は怒りや情欲やどん欲には気をつけなければいけない。たとえば、ハヌマーンの場合をごらん。腹立ちまぎれに、彼はセイロンを焼いた。ついに、彼はシーター\*がアショーカの木の林の中に住んでいるのを思い出した。それで、火が彼女を傷つけはしないかと恐れてふるえだした」*　　☞（『福音』２７頁上段L４～L８）

**例４：あるときラーマがハヌマーンに、『お前は私をどう見るか』とたずねられました。するとハヌマーンは、『おおラーマ、「私」の感じを持っているあいだは、私はあなたが全体で私は一部である、あなたはご主人であり私は召使いである、と見ます。しかし、おおラーマ、真理の知識を持っているときには、あなたは私であり、私はあなたであることを悟ります』と答えました。**　☞（『福音』３６頁下段L８～L１３）

このハヌマーンの答えは、とても有名です。

二元論、限定された非二元論、非二元論、の**すべての哲学を調和する有名な答え**だからです。

**二元論哲学　ドヴァイタ**

**「あなたは持ち主、私は召使いです」**

ドヴァイタの考えで、生き物とブラフマンは別の存在です。

ブラフマンは永遠、無限、絶対でとても偉大な存在。

ジーヴァ、人間は有限で一時的。

**限定（条件つき）非二元論哲学　ヴィシシュタ・アドヴァイタ**

**「私はあなたの一部分です」**（波が海の一部分であり、枝が木の一部分であるように）

人間はブラフマンの一部です。ブラフマンはフル（完全）ですね。すべての生き物はブラフマンの一部分です。宇宙も一つの生き物です。

**非二元論哲学　アドヴァイタ**

**「あなたと私は同じ存在です」**

私とブラフマンは同じです。生き物とブラフマンは同じです。すべてはブラフマンです。ブラフマン以外なにも存在しません。

**同じ人でも心の状態によって、二元論的、限定された非二元論的、非二元論的になる**

シュリー・ラーマクリシュナは、とても素晴らしい例を使って、本当は哲学間の戦いは必要ない、すべては同じでただ見方が違うだけだと説明しています。同じ人が違ったムードになったとき、好みが変わるように、哲学も哲学者の心の状態で、変わることがあるのです。

・ある人が肉体に意識を持っていると、「ブラフマンと私は別のもの」だと感じます。

・その人が、自分は肉体を持っているけれど、魂もある、私は体だけではなく、ブラフマンもいます、「私はブラフマンの一部分」です、という考えの時は、限定された非二元論です。

・同じ人がもし肉体的な意識が全くなくなって魂意識だけになると、「ブラフマンと私は同じ存在」です、と考えます。

このように、心がなんの意識を持っているかで見方が別々になります。

シュリー・ラーマクリシュナも同じです。あるときはドヴァイタ、あるときはアドヴァイタ、またあるときはヴィシシュタ・アドヴァイタ、でした。

我々も同じような経験がありますね。

朝起きて、まだ眠い、その時本当は体意識が強いです。

仕事に熱中すると、体意識がだんだんなくなります。

お腹がすいたら、また体意識が戻ります。

病気の時も体意識が強くなります。

元気な時は、体意識はなくなります。

もし体の一部に問題があると、心はそこに向きます。

・📖 （読む）「師と弟子」１８頁下段Ｌ１７～１９頁上段Ⅼ４

私に果物が必要か。私はこの人生を

　　　ほんとうに実り豊かにする、果物を持っている。

　　　私のハートの内に、ラーマの木が生えていて、

　　　その果実として救いを実らせる。

　　　ラーマという願望成就の木の下に、

　　　私はくつろいですわり、なんでもほしい果実を摘む。

　　　しかしもしあなたが果実をうんぬんするなら―

　　　私は普通の果実のではないぞ。

　　　見よ、私は行く、あなたに苦い果実を残して。

（解説）

カルパタル　モクシャ　ファラ　ディクシャ

自分の心の中にラーマのカルパタルの木を持っています。

それがベンガル語を直接に訳した意味です。

ファラphalaは果物という意味です。

**カルパタル**

「願望成就の木」という翻訳の原語は、「カルパタル」です。

カルパkalpa（すべての願い）＋タルtaru(木)＝カルパタル：全ての願いをかなえる木

その木の下に座るとなんでも願いが叶うと言われています。道徳的な願い、お金、世俗的な願い、すべてが叶うのです。本当はその木を見たことがないけれど、聖典の中にその物語があります。

**歌の意味**

神様にお願いすると、人間の人生の４つの果実、ダルマ（正義）の果実、アルタ（富）の果実、カーマ（欲望の達成）の果実、モクシャ（解脱）の果実、それらをすべて神様からもらうことができます。ハヌマーンは心の中にラーマのカルパタルの木を持っていました。だから、神さにお願いすると、なんでもかなえることができます。４つの果実の中で人生の一番の目的は「解脱の果実（モクシャ・ファラ）」ですね。

ハヌマーンは、「**私は解脱の果実（モクシャ・ファラ）という素晴らしい果物さえ持っているのに、どうしてあなたはふつうの果物でわたしを誘惑しているのですか？　変ですよ**」それが詩の意味です。

心にラーマのカルパタルの木を持っていると、モクシャ（解脱）だけでなく、なんでも願いが叶いますが、ハヌマーンは高いレベルの信者でしたので、神様のこと以外なにも望みません。

詩の最後に、「ラーヴァナと殺す」という目的のことにも触れています。「苦い果実を残す」という言葉の意味は、「ラーヴァナを殺すために武器を持っていた」という意味です。

・📖 （読む）「師と弟子」１９頁上段Ｌ１０～１９頁上段Ⅼ１９

*長いことたって、師は普通の意識に戻られた。彼の顔は微笑に輝き、身体はゆるんだ。感覚は普通に働きはじめた。彼はラーマのきをとなえつつ歓喜の涙を流された。Mは、このまぎれもない聖者が、数分前に五歳の子供のようにふるまっていたあの人なのであろうか、と不思議に思った。*

*師はナレーンドラとMに向かって、「私は、お前たちが英語でしゃべり、議論するのをききたい」とおっしゃった。*

*二人とも笑った。*

*しかし彼らは母国語でしゃべり続けた。Mにとって、師の前で議論することはもはや不可能であった。シュリー・ラーマクリシュナは主張なさったけれども、彼らは英語では話さなかった。*

（解説）

シュリー・ラーマクリシュナは、涙の流れ方について『福音』の中で言っていました。

**後悔、悲しい、苦しみの涙は、目頭から出る。**

**霊的な涙は目じりから出る。**

神様のことを考えて喜びにあふれて涙が出ることありますね。

そして、シュリー・ラーマクリシュナは、子供みたいですね。英語でナレーンドラとMさんが議論しても、英語が全然わからない。ですけれども、聞きたいですから。

・📖 （読む）「師と弟子」１９頁上段Ｌ２０～１９頁下段Ⅼ５

*午後五時に、ナレーンドラとMを除くすべての信者たちは師に別れを告げた。Mが寺院の中を歩いていると、思いがけなく、師がガチョウの池のほとりでナレーンドラに話をしておられるのに行きあった。シュリー・ラーマクリシュナはナレーンドラにおっしゃった、「これ、もう少したびたびおいでよ。お前は新入りだ。知り合いになりはじめのころには、**人びとは恋人同士のようにたいへん頻繁に行ききをするものだ。（ナレーンドラとM、笑う）。だからどうぞ、来ておくれ。どうかね？」*

（解脱）

*「人びとは恋人同士のようにたいへん頻繁に行ききをするものだ。」*

という部分の日本語と英語は、原語のベンガル語と違います。

「恋人」ではなく、ポティ「結婚したてのだんなさん」のことです。

インドでは、結婚した後、すぐに夫婦は一緒に暮らさないことが多いです。なぜなら両親が悲しみますから。それで結婚したばかりのだんなさんは、足しげく奥さんの家に通います。私にもその経験があります。私のお姉さんが結婚した時も、お婿さんがうちによく来ていました。私たちはおじさんが家に来てくれることを喜んでいました。

「恋人」という翻訳ではイメージが出ないです。英語に翻訳をしたニキラーナンダジは、たぶんインドのその習慣を西洋の方が理解できないと思って、loverと訳したのだと思います。

**第2版出版の時には、変更をしてください。**

（田中かん玉さんの翻訳では「新婚のお婿さんみたいに」となっています）

**印象を深めるために世俗的な例も使った**

シュリー・ラーマクリシュナは、最近ドッキネッショルに来始めたばかりのナレーンドラに、もっと頻繁に来てほしくて、「結婚したてのだんなさん」の例を使いました。

シュリー・ラーマクリシュナが例を使う目的は、深いイメージを出すためです。そのためには、霊的な例か世俗的な例かという区別はしません。そして「結婚したてのだんなさん」の例はとても世俗的な例なので、ナレーンドラとMさんは笑いました。

『福音』が面白いのは、ときどきとても世俗的な例を使っているところです。そうすると、皆さんは、すぐに思い出すし、印象も深くなるからです。バイブルにもお釈迦の教えにも、世俗的な例はあまりないです。

・📖 （読む）「師と弟子」１９頁下段Ｌ６～１９頁下段Ⅼ８

*ブラーフモー・サマージ\*の会員であるナレーンドラは、約束を守ることに非常にだった。彼は微笑して言った、「はい、そのようにいたしましょう」*

この部分の田中かん玉さんの訳は

「ブラフマ協会の会員であるナレーンドラは笑いながら答えた。ええ、そうするように努力いたしましょう。」

です。こちらの翻訳が正しいです。オリジナルに、「約束を守ることに几帳面だった」という言葉はありません。ニキラーナンダジが英語に翻訳するときに付け加えました。なぜなら、ブラーフモー・サマージはとても厳しかったので、そのことを説明するために付け加えたのだと思います。

（第4５回『ラーマクリシュナの福音』勉強会）以上